

## 首尾一貫感覚のサブタイプの探求 —有意味感の独自性と楽観性、 自尊感情、抑うつに着目して—

今井田 貴裕\*・磯和 壮太郎\*\*

### Exploring Subtypes of Sense of Coherence: Focus on Uniqueness of Meaningfulness, Optimism, Self-esteem and Depression

Takahiro IMAIDA\* and Soutarou ISOWA\*\*

In this study, SOC (Sense of coherence) subtypes were extracted from 139 university students, and psychological traits of optimism, self-esteem and depression were examined. CL 1, with a low comprehensibility and manageability and an average meaningfulness, had the lowest SOC and a negative psychological trait. CL 2 also had an average SOC and psychological traits. CL 3, with average comprehensibility and manageability and a high meaningfulness, had a slightly positive psychological trait, probably due to a higher meaningfulness in the SOC. CL 4 had a higher SOC overall and a positive psychological trait. Meaningfulness was therefore confirmed to be unique from CL 1 and CL 3.

key words: sense of coherence, subtype, meaningfulness

#### 問題と目的

首尾一貫感覚 (Sense of coherence : SOC) は、ストレスに対する把握可能感と処理可能感、ストレスの対処に意味を見出すことのできる有意味感の3下位概念で構成される (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。これまで、SOC が楽観性 (e.g., Pallant & Lae, 2002) や自尊感情 (e.g., 小銭・村松, 2015), と正に相関する点や、SOC の高い人の抑うつが低い点 (e.g., 嘉瀬・大石, 2015) などが報告されており、強いSOCを有する人々はこうした肯定的な心理的特徴を有すると考えられる。しかし、上述の報告はいずれもSOC全

体との関連を検討したに過ぎない。また、安定した長期的な健康には有意味感の強さが必要とされている点や、一部のSOCのみが強いまたは弱い人々の存在が仮定されている点 (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) を考慮すれば、SOCのサブタイプを探求する必要がある。

そこで、本研究ではSOCのサブタイプを抽出し、サブタイプ別に健康に関連する心理的特徴 (e.g., 加藤, 2001) である楽観性や自尊感情、抑うつを取り上げて検討した。

#### 方 法

**調査協力者** 男性57名と女性82名の一般大学生139名 (平均年齢19.73歳 (SD=1.06)) を分析対象とした。

**手続き** 国立A大学において、授業後に研究の主旨と協力の任意性、個人情報等の匿名性を口頭と書面で説明し、研究協力を依頼した。研究の同意をした者は書面に記載されたQRコードからWebの質問票にアクセスし回答した。

**尺度構成** SOCは日本版SOC-13 (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) で測定し、把握可能感と処理可能感、有意味感といった各下位尺度得点を7件法で得た。楽観性は改訂版楽観性尺度 (坂本・田中, 2002) で測定し、楽観性と悲観性といった各下位尺度得点を5件法で得た。自尊感情はRosenberg自尊感情尺度日本語版 (桜井, 2000) で測定し、福留・森永 (2018) に倣い、肯定的項目群因子 (Positive Self-Esteem : PSE) と否定的項目群因子 (Negative Self-Esteem : NSE) といった各下位尺度得点を4件法で得た。抑うつはうつ病自己評価尺度邦訳版 (島他, 1985) で測定し、尺度得点を4件法で得た。

**倫理的配慮** 第二著者の過去の所属先 (大阪大学) の研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号 : 18049)。

#### 結 果

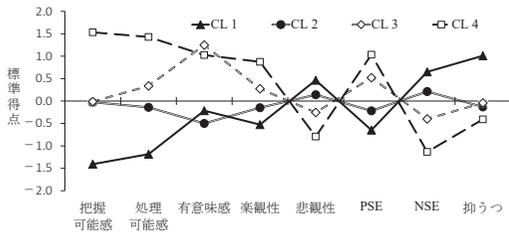
尺度間の比較を行うため、尺度の得点を標準得点に変換し、SOC-13の下位尺度得点を投入したクラスタ分析 (ユークリッド距離・ward法) により、調査協力者を4 Cluster (CL) に分類した。Figure 1には標準得点に換算した各CLの特徴を、Table 1には各CLの尺度毎の平均値、多重比較の結果をそれぞれ示した。CLを独立変数、各尺度を従属変数とした多変量分散分析の結果、CLの主効果が0.1%水準で有意であった (把握可能感 :  $F(3, 135) = 49.28$ , 処理可能感 :  $F(3, 135) = 66.52$ , 有意味感 :  $F(3, 135) = 45.45$ , 楽観性 :  $F(3, 135) = 9.04$ , 悲観性 :  $F(3, 135) = 7.16$ , PSE :  $F(3, 135) = 16.90$ , NSE :  $F(3, 135) = 17.93$ , 抑うつ :  $F(3, 135) = 9.45$ )。多変量検定 (Pillai's Trace, Wilks's  $\lambda$ , Hotelling's Trace, Roy's Largest Root) も0.1%水準で有意であった。

多重比較の結果、SOCのサブタイプと考えられる4 CLが抽出された。CL 1 ( $N=19$ ) は低い把握可能感と処理可能感と平均的な有意味感を有する群であり、楽観性やPSEが低

\* 人間環境大学  
University of Human Environments, 6-2, Aza  
Kami-Sanbonmatsu, Motjuku-cho, Okazaki, Aichi 444-  
3505, Japan.  
(imaidataka@gmail.com)

\*\* 名古屋芸術大学  
Nagoya University of Art 281, Koi, Kumanosho, Kitana-  
goya, Aichi 481-8503, Japan.

Figure 1 SOCのサブタイプ



く、悲観性やNSE、抑うつが高かった。CL 2 (N=81) は、平均的なSOCの群であり、その他も平均的であった。CL 3 (N=20) は、強い有意味感および平均的な把握・処理可能感の群であり、楽観性がやや高く、PSEが高く、悲観性やNSEがやや低く、抑うつが平均的であった。CL 4 (N=19) は強いSOCの群であり、楽観性とPSEが高く、悲観性やNSEが低く、抑うつが平均的であった。

### 考 察

分析の結果、4群の特徴的なSOCのサブタイプが確認された。そして、有意味感が把握可能感や処理可能感とは異なる性質を有する可能性と、肯定的な心理特徴には全体的にSOCの強さが必要である可能性がそれぞれ示された。なお、本研究が一般大学生を対象としたためか、データ全体の抑うつの尺度得点が低く、標準得点に換算した場合には平均的であるが、実際には低いCLがほとんどであった。

CL 1・3は把握可能感と処理可能感が共変関係にあり、それよりも有意味感が強い群であった。これは、SOCが把握・処理可能感と有意味感の2因子に分類されること (e.g., 坂野・矢島, 2005) が示すように、有意味感がSOCのうちでも独自の機能を有すると考えられる。CL 1については、ストレスを把握・処理できている感覚が少ないものの、その対処には多少の意味が見出している群であろう。そのため現時点では否定的な心理的特徴を示したのかもしれない。CL 3については、ストレスに対する把握・処理できる感覚が平均的であるためか、その対処にも意味を見出すことのできる群であろう。こうした群は、健康生成論 (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) に基づけば、継続的なストレス対処を通じて把握・処理可能感もより強くなることで、より健康的になると考えられている。他方、CL 2・4はSOCの下位概念間で大きな差がない群であった。CL 2については、SOCが平均的な群であり、その他の心理的特徴も平均的であった。大半の調査協力者が分類されたのは、本研究が健康な大学生を対象としたためであろう。CL 4については、SOC全体が高く、肯定的な心理的特徴を示しており、極めて健康的な群と考えられる。

なお、本研究では、SOCの下位概念が全て共変関係にあるCL 2・4に分類された人々がデータの大半を占め、一部のSOCの強さが異なる人々は少数であった。そのため、データ

Table 1 各CLの平均値と多重比較の結果

	全体	CL 1	CL 2	CL 3	CL 4	多重比較 (Tukey)
把握可能感	3.44	2.13	3.42	3.43	4.87	CL 4>CL 3=CL 2>CL 1
処理可能感	3.85	2.74	3.72	4.16	5.18	CL 4>CL 3>CL 2>CL 1
有意味感	4.21	3.99	3.69	5.54	5.30	CL 3=CL 4>CL 1=CL 2
楽観性	3.26	2.84	3.14	3.48	3.96	CL 4>CL 2=CL 1, CL 3>CL 1
	3.06	3.39	3.16	2.88	2.51	CL 1=CL 2>CL 4, CL 1>CL 3
PSE	2.81	2.39	2.67	3.15	3.48	CL 4=CL 3>CL 2=CL 1
NSE	2.31	2.78	2.46	2.02	1.50	CL 1=CL 2>CL 3>CL 4
抑うつ	1.80	2.13	1.75	2.13	1.66	CL 1>CL 3=CL 2=CL 4

注) 各値は標準得点換算前のもの

全体を用いた分析では、後者の人々は分析の組上に上がりにくいと考えられる。そのため、SOCの下位概念に着目したサブタイプの探求は今後も必要であろう。

### 引用文献

- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. Jossey-Bass Publishers, San Francisco.
- (アントノフスキー, A. 山崎喜比古・吉井清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム—— 有信堂高文社)
- 福留 広大・森永 康子 (2018). 自己評価の尺度における肯定的・否定的項目群因子の年齢別の分析——ローゼンバーグ自尊感情尺度と特性的自己効力感尺度—— 教育心理学研究, 66, 212-224. <https://doi.org/10.5926/jjep.66.212>
- 嘉瀬 貴祥・大石 和男 (2015). 大学生におけるタイプ A 行動様式および首尾一貫感覚 (SOC) が抑うつ傾向に与える効果の検討 パーソナリティ研究, 24, 38-48. <https://doi.org/10.2132/personality.24.38>
- 加藤 司 (2001). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係. 心理学研究, 72, 57-63. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.72.57>
- 小銭 寿子・村松 咲花 (2015). 学生のストレス対処能力 (SOC) と自尊感情に関する一考察——文献レビューと試行的質問紙調査から—— 名寄市立大学社会福祉学科研究紀要, 4, 31-42.
- Pallant, J. F., & Lae, L. (2002). Sense of coherence, well-being, coping and personality factors: Further evaluation of the sense of coherence scale. *Personality and individual differences*, 33, 39-48. [https://doi.org/10.1016/S0191-8869\(01\)00134-9](https://doi.org/10.1016/S0191-8869(01)00134-9)
- 坂本 真士・田中 江里子 (2002). 改訂版楽観性尺度 (the revised Life Orientation Test) の日本語版の検討 健康心理学研究, 15, 59-63. [https://doi.org/10.11560/jahp.15.1\\_59](https://doi.org/10.11560/jahp.15.1_59)
- 坂野 純子・矢嶋 裕樹 (2005). 大学生における首尾一貫感覚 (SOC) スケールの構造化 日本公衆衛生雑誌, 52, 34-45. [https://doi.org/10.11236/jph.52.1\\_34](https://doi.org/10.11236/jph.52.1_34)
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 鳥 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723. <https://doi.org/10.11477/mf.1405203967>